上越／湯檜曽本谷・ケサ丸沢

遡行日：09 年 7 月 12 日
メンバー：三井（L、記録）、志満、菊地、新井

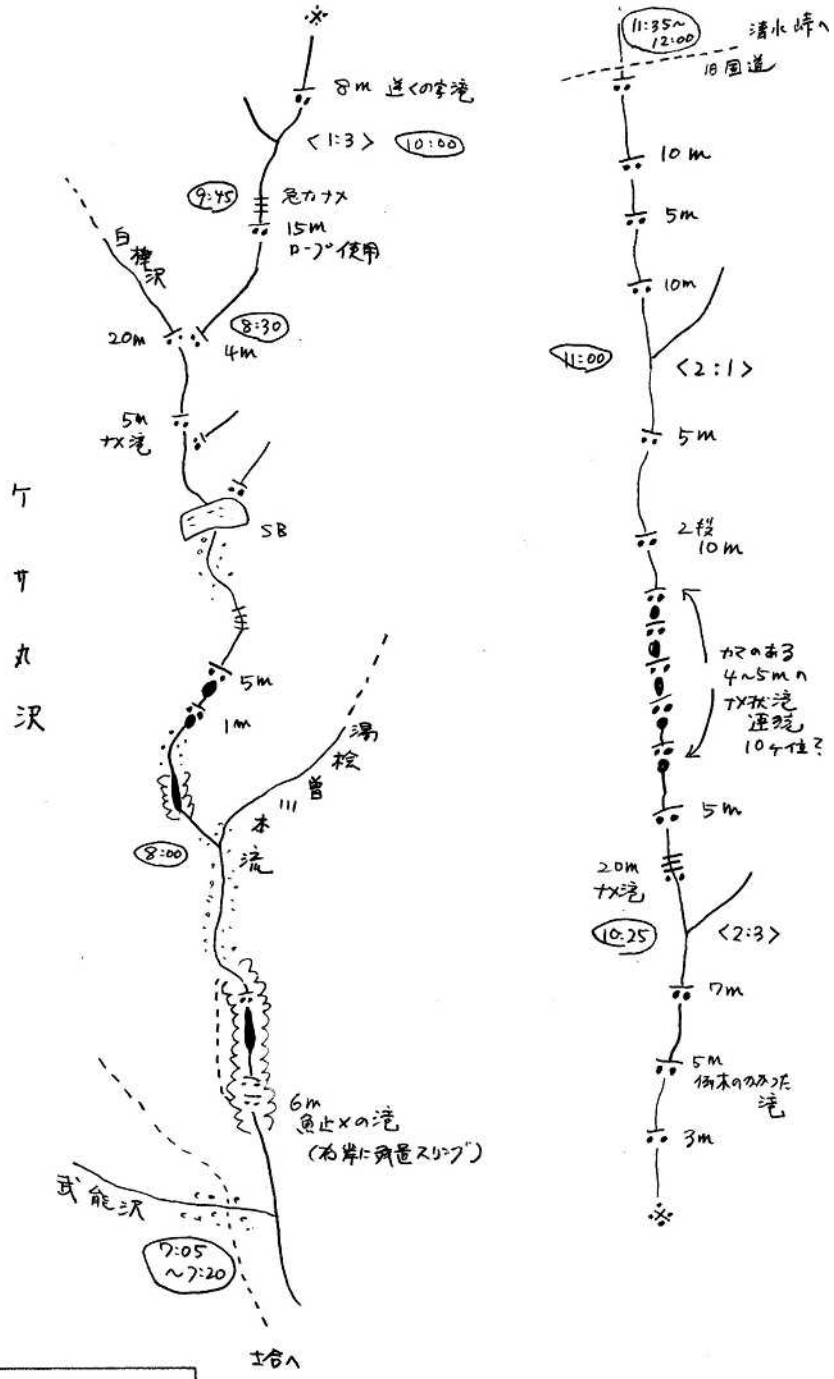
今月末の３連休の山行の為のトレ山行として計画する。
はじめ「大倉沢」を予定したが、日帰りとしては少し時間がかかりそうなので、同じ湯檜曽川で検索しているうちに探り当てた沢。僕としては初めて目にした沢だが発表されている記録を見る限り中々面白そうである。

梅雨時の今、沢の変更、中止も考慮せざるを得ない中、まー、メンバーの心掛けが余程いいのか予定通りの実施となる。
深夜、一の倉沢の駐車場に車を滑り込ませ軽く入山祝いをして仮眠。
明け方、ヘリの爆音で目が覚める。何をしているのか暫くホバリングをしていたが間もなく爆音は去った。おかげですっかり目が覚めてしまい予定より早めに歩き出す事になった。
一時間程で武能沢に到着、沢の身支度をして湯檜曽川の本流に下る。
本流は直にゴルジュ状の“いかにも”の雰囲気が漂い、本流の素晴らしさが伺える。
魚止めの滝がかかっているが右岸から残置のスリングに助けられ越える。その先に狭いトロと続くガ、盛夏なら水遊び気分で通過するのもいいが曇りで水温も低い中では「巻こうか。」の声に異論はでない。あっさりと右岸を巻く。
平瀬のゴーロを暫く歩いて行くと右岸から小沢が流入してくる。ここが「ケサ丸沢」の出合いとなる。
知らなければあっさりと通過してしまいそうな感じだが、果たしてどんな沢だろうか。
狭いトロを通過、小滝を越えるとＳＢが架かっている。今年は寡雪で残雪もないと思っていたがやはり上越の沢だ。ＳＢは幸い、まだがっしりしていてくぐる事に不安はない。
その先に右岸から 20mの滝を懸けて「白樺沢」が流入している。ちょっと気を引くが遡行するような事はあるのだろうか。
行く手に大き目の滝が現れる。20m？否、15m位か。水流の右にルートがとれそうだ。下部は容易でノーザイルで中段にあがる。その上にちょっとした垂壁がある。ここはショルダーで越えればいい。今回は菊地君にトップを任せてきているのでロープの末端を差し出すと「僕は 80 キロですよ。」と菊地君。「土台が潰れるわ。」で、僕がロープをつける。
菊地君の肩に乗って上を探るも身体をズリ上げるホールドがない。ハーケンを１本埋めてスリングをかけ、それに足をねじ込んで垂壁の上にでる。
落ち口は半円状の急なランペになって上にでる。
その先は急なナメが続いていて中々に素晴らしい景観をみせている。
適度な高さと傾斜の滝が続き飽きさせない。左岸に枝沢を分けるとナメが続く。適当な傾斜があり、「ナメ状の滝」というのか「滝状のナメ」というかそんな状態が続く。
水流のド真ん中を登ってもいいのだが

スリップすれば痛いだけでは済まない。勢い、端のボサを引っ張りながら身体を引き揚げていく事になる。
やがて沢が狭まり源頭状の趣となるが蓬峠に出る手前で踏跡が横切っているハズだ。それを見落とすといらない藪漕ぎをしなければならない。が、それは捜すまでもなく間もなく見出す事が出来た。
踏跡といったがこれは実は清水街道と呼ばれた古道で、明治時代に一旦、国道として開通したものの道路の崩壊などで放置されてしまったものだ。勿論今は登山道としてしか機能していないがサイクリストにはある種、目標になってもいるらしい。
実質の遡行はここまで。沢靴からズックに履き替え、新道と呼ばれる湯檜曽川沿いの道を辿って帰路につく。

「ケサ丸沢」は日帰りの沢としてはマズマズの内容を持っていると思う。こちらの方面の沢登りを計画して天候の不安等がでて、急遽代替地を捜す場合には好適で、頭の片隅にいれておいてもいいだろう。

［余計な話し。］
帰途、高速に乗る前に食堂に寄ったんですがここで僕はカツどんを食べたんですね。
まー、僕もかつどんは好物で今までの人生の中で何百杯もカツどんは食べてきたと思うけどその中でも一、二位を争う酷さでしたね。
店に入った時に店の雰囲気とかおばあさんがでてきたりで「ン？」という感じで「ちょっとこれは…。」と思ったんですが、散々待たされて漸く出てきましたが案の定でしたね。
店の名前は代表的山道具の名前で、山の関係者の客が多いそうですが「へぇーそうですか。」



09年7月12日
上越／湯桧曽川・ケサ丸沢